1

「あ」

寮のロビーを通りかかった郁は、雑誌ラックの前で足きを止めた。

目に留まったのは、グルメ情報に詳しいタウン誌だ。

郁はその雑誌を手に取ると、空いているソファを見つけ、腰を降ろした。

そろそろ堂上との約束の店を決めないといけない。

昇任試験後にカミツレ茶が飲める店に連れていって欲しいと言われたもののその後何も言われなかったので、その場のノリでごく軽い気持ちで言っただけなのだと決めつけていた。

二人でお茶を飲みに行くだなんてそんなデートみたいな約束、本気にしたら教官が困るに決まってるし。

そう思い込もうとしていたのに、また言われたのだ。茨城県展の時、カミツレの花を二人で見ていたら「後はお茶だな。東京戻ったら探しとけよ」と。

そんなに深い意味はないはずだ。ただカミツレの花を見て、そのせいでますますお茶も飲んでみたくなっただけ。

そう思ってはいるけれど、頬が熱くなってしまう。考えすぎだってば。意識してるの、絶対にあたしだけなのに。

それでも堂上との約束がとてもうれしくて、お店を探すことすら楽しかった。

早く店を決めて、一度下見に行きたいところだ。

郁はタウン誌をめくった。候補の店はあるけれど、他に良さそうな店があるのならそっちでもいいかもしれない。

「隣、いい？」

ふいに声をかけられ、顔を上げて「はい、どうぞ」と答えた。知らない男性だ。郁より数歳年上だろう。ロビーの混む時間帯は決まっており、こうして相席になることも日常茶飯事。わざわざ声をかける人の方が少ないぐらいだ。

特に何も思わず、郁は再び雑誌に視線を落とした。

「ねえ、何を真剣に読んでるの？」

再び声をかけられ、郁は再度顔を上げた。相手の笑顔を見る。整った顔立ちだった。やさしく微笑む様子は、小牧教官に雰囲気が近いかもしれない。

「あ、えっと、どこか良いカフェがないかなあと思って」

戸惑いつつ一応答えた。自分の顔覚えの悪さはさすがに自覚している。どこかで会った人だろうか。でも、やっぱり知らない人だ、よね？

「ふーん、俺、吉祥寺に良い店知ってるよ。一緒に行く？」

にこにこと笑う彼に郁は困惑した。

やばい。マジでこの人覚えてない。同期ではない、と思う。業務中にどこかで知り会ったのだろうか。